

白山の自然誌 12

白山火山



石川県白山自然保護センター

はじめに

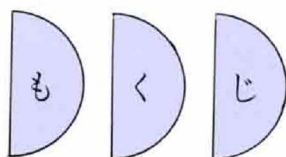
白山は2,702mの標高を有する独立峰です。白山火山が火山活動を開始したのは、今から30～40万年前です。当時は、尾添尾根の加賀室跡付近を中心に噴火していました。その後、活動場所は中ノ川支流の地獄谷へと移動し、現在の山頂部から噴火を始めたのは、いまから数万年前と考えられています。その間、古い時代に形成した火山体は侵食でほとんど消滅し、その後、新しい火山が他の場所に誕生するということを、繰り返してきました。ほとんど変化がないと思われる山の歴史も、10万年から数十万の間をみれば、様々な変遷を経てきたことがわかります。白山火山の活動は歴史時代まで続き、最も新しい噴火は今から330年ほど前のものです。

本誌は、長い歴史をもつ白山火山の生い立ちや古文書に記されている白山火山の噴火記録、将来の白山のことを解説したものです。白山の自然を理解する際の、一助となれば幸いです。



白山山頂部の火口

表紙	白山山頂部 御前峰(右)と剣ヶ峰 (左)、手前の池は 翠ヶ池。
裏表紙	白峰村から白山遠望



日本列島の火山	2
白山周辺の火山	4
白山火山を形づくるもの	6
古い火山と新しい火山	8
加賀室火山	10
古白山火山	11
新白山火山・うぐいす平火山	12
三主峰のでき方	14
最近1万年の活動	16
歴史時代の活動	17
白山周辺の地震	20
これからの白山	21

日本列島の火山

日本列島は火山の多いところとして、世界的に知られています。地質時代という第四紀という新しい時代に誕生した火山は、200近くにもなります。第四紀とは今からおおよそ160万年前以降から現在までの、最も新しい地質時代のことです。

火山は日本列島のいたるところに、平均的に分布しているわけではありません。火山の分布が密なところと、そうでないところがあります。東北日本例えば、中央部に多くの火山が分布していますが、東の太平洋側の方へゆくと、火山が存在しないようになります。その変化は顕著で、ある線を境に火山が存在する地域と存在しない地域に区分できるように見えます。その境界を火山前線、もしくは火山フロントとよんでいます。火山前線は北海道から東北地方へて伊豆諸島へ続く地域や九州では明瞭ですが、近畿から山陰・山陽にかけての地域には火山が少なく、火山前線はそれほどはっきりしていません。

日本列島の火山のなかには、古い書物に活動の記録が残されているものと、そうでないものがあります。活動記録があるということは、それだけ将来活動する可能性が高いといえます。活動記録のない火山は今後活動する可能性が低いとはいえ、噴火しないということを必ずしも意味しているわけではありません。歴史時代の活動記録がない御岳山が、1979年に噴火したのはそのよい例です。



白山・御岳山(後方右の山)・乗鞍岳(後方左の山)の各火山
(県民生活課提供)



日本列島の第四紀火山の分布(大森ほか、1988をもとに作成。一部改変)
 おおよそ160万年前以降に誕生した火山。

白山周辺の火山

石川・岐阜・福井の各県にまたがる白山山系には、1,500～2,000m級の山が数多くあります。そのうち、白山・大日山・経ヶ岳・丸山・願教寺山・毘沙門岳・大日ヶ岳・鷲ヶ岳が、ここ360万年の間に形成された火山です。他に標高はそれ程高くありませんが、金沢市の戸室山も火山です。これらの火山が形成した年代は、戸室山が40～60万年前、大日山が330～360万年前、経ヶ岳が90～130万年前、願教寺山が270～310万年前、丸山が30～40万年前、毘沙門岳が30～40万年前、大日ヶ岳が90～100万年前、鷲ヶ岳が120～150万年前です。白山火山は誕生したのが約40万年前で、活動は歴史時代まで続いています。白山山系では、歴史時代の活動記録をもつ唯一の火山です。



戸室山(右)とキゴ山(左)
溶岩円頂丘で、両者をあわせて、普通、戸室火山という。約40～60万年前に形成した。(米山競一氏撮影)

大日山火山
約350万年前に誕生した。
誕生当時の火山の斜面は残されていない。勝山市から。



白山火山を形づくるもの

標高2,702mの白山の山体が、火山の活動によってすべてできあがったと思われるかもしれませんが、そうではありません。白山火山の噴出物は白山の山頂部や周辺の稜線部を中心に広く分布しています。ところが、噴出物の厚さは普通200~300m程度で、最も厚いところでも500mを越えることはほとんどありません。山体の大部分は、一、二億年前から数千万年前のあいだにできた変成岩や堆積層・火山岩からできています。つまり、白山火山は1,500~2,000mの高地の上に形成された火山と考えたらよいでしょう。

白山火山を形づくっているもので、最も量の多いのが溶岩です。地下にあったマグマが地表にでて、そのまま斜面を流れ、冷却して固まったものです。溶岩の厚さは、普通数十m、長さは数kmにも達することがあります。冷え固まる際の収縮によって、溶岩の流れた面に垂直の方向に、割れ目ができるのが普通です。割れ目の形が柱に似ていることから、このような割れ目を柱状節理といいます。量的には溶岩ほど多くありませんが、火砕流堆積物も白山火山を構成する大事な要素です。大小さまざまな火山岩の塊と火山ガスが、いっしょになってなだれのように斜面を流れ、堆積したものです。その流れは一般に火砕流と呼ばれ、速さは時速数十kmにも達します。規模の小さなものは、熱雲とよばれることもあります。弥陀ヶ原の先端にあるクロボコ岩は、火砕流(熱雲)によって頂上から運ばれてきた火山弾です。白山火山はこのような溶岩や火砕流堆積物、ほかに火山灰などを何度も噴出し、それらが積み重なってできあがったものです。

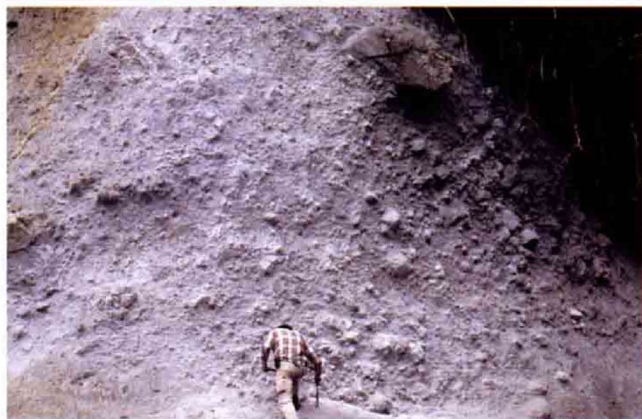


溶岩流
柳谷と赤谷の間の
山稜部に分布。

クロボコ岩
弥陀ヶ原の先端部にある。パン皮火山弾で、火砕流堆積物の構成物。よく似た岩塊が、弥陀ヶ原に多くある。



火砕流堆積物
大白川で見られる規模の大きなもの。



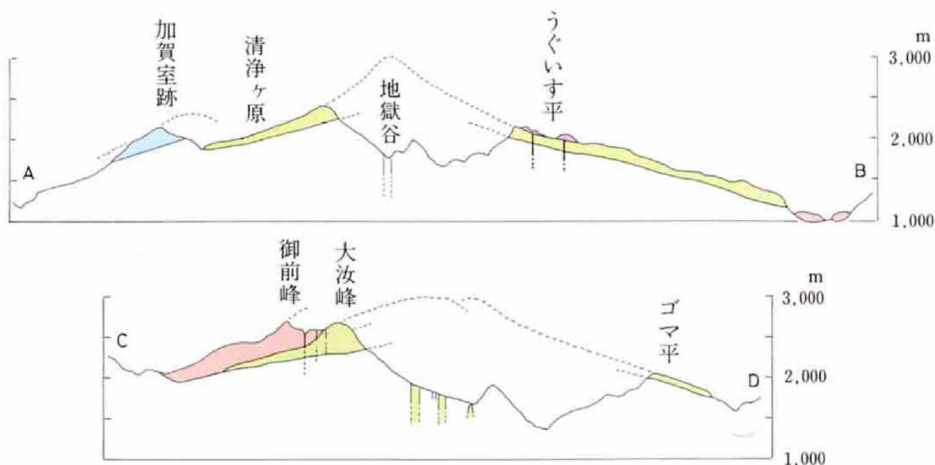
火山灰層
白い部分が火山灰層、黒い部分は泥炭層で、過去に生育していた植物の遺骸がもとになっている。

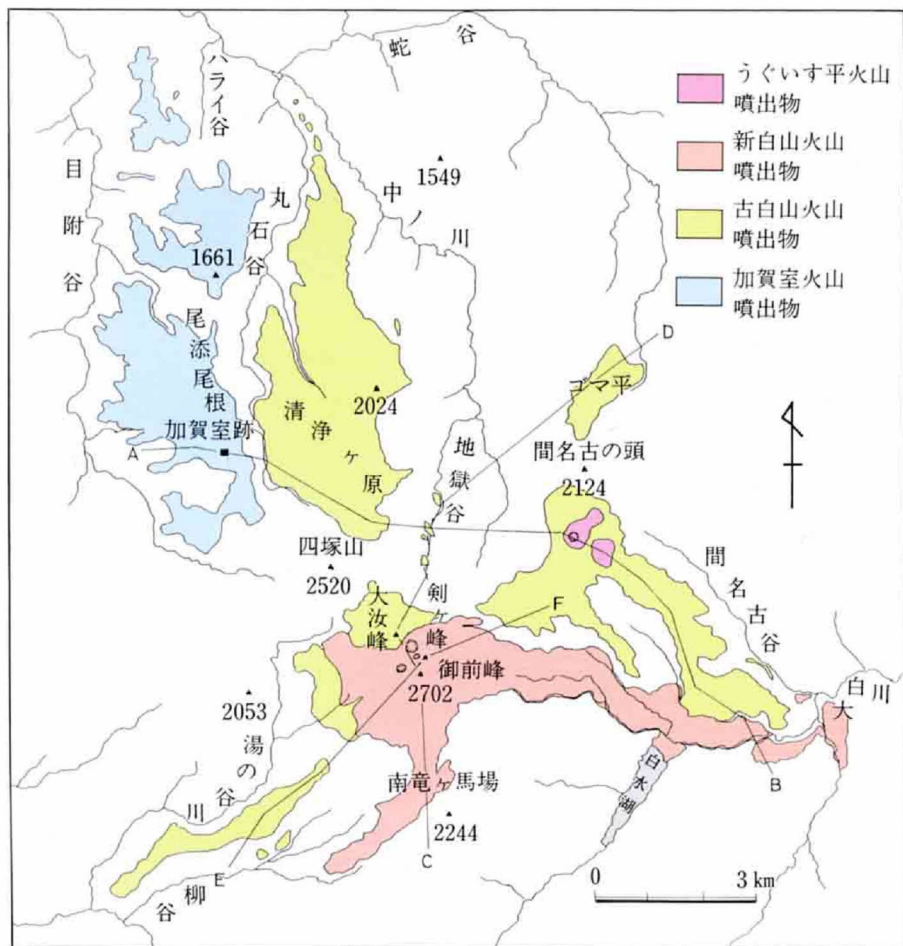


古い火山と新しい火山

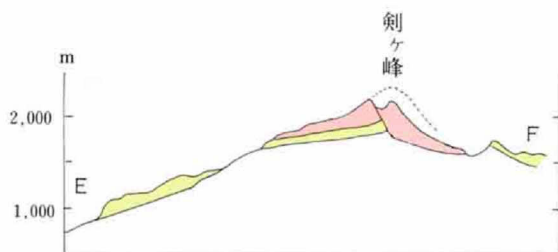
白山の山頂部には火口や火口湖があり、かつて激しい火山活動があったことを物語っています。そこでの活動は、主に山頂の南や東のほうに溶岩などを噴出しました。弥陀ヶ原や南竜ヶ馬場の平坦面をつくっている溶岩がそうです。しかし、白山火山の噴出物には、分布や傾斜の方向などから、他の場所から流出したと考えられるものもかなりあります。一つは、中ノ川支流の地獄谷から噴出したものです。もう一つは、尾添尾根の加賀室跡付近から流出したと考えられるものです。

地獄谷は、現在標高1,500mあたりまで深く侵食されています。加賀室跡付近にも、火山と思われる高まりはありません。それは、そのあたりにかつて存在していた火山体が、長い間の侵食によってもとの形が見る影もなくなったためです。地獄谷と加賀室跡付近にかつて存在していた火山は、残されている噴出物から成層火山であったと考えられており、それぞれ古白山火山と加賀室火山と呼んでいます。加賀室火山のほうが、古白山火山よりも古い火山です。これら2つの火山体に対して、現在の山頂部を中心とする山体を新白山火山といいます。これらの他に、中宮道のうぐいす平に、火山活動でできた小さな高まりが2個あります。この火山はうぐいす平火山と呼んでいます。うぐいす平火山は、新白山火山とほぼ同じ時期にできたと考えられています。





白山火山の地質図(長岡ほか、1985を簡略化)



白山火山の地質断面図

(左図と前頁の図、長岡ほか、1985を簡略化)

高さは水平距離に対して1.5倍に誇張してある。A-B、C-D、E-Fの断面位置は、地質図(上図)に示されている。

加賀室火山

加賀室火山が誕生したのは、今から30～40万年前です。この火山体の活動の中心があったと考えられている加賀室跡は、山頂の北西約6kmのところにあります。加賀室火山の噴出物は主に溶岩からなり、火砕流堆積物などは多くありません。噴出物は、加賀室跡がある尾添尾根から西の目附谷にかけての比較的なだらかな斜面や、ハライ谷と目附谷にはさまれた稜線に主に分布し、一般に北へゆくほど薄くなる傾向があります。かつての火山体の火山斜面を形作っていたとおもわれる緩斜面はほとんどなく、誕生当時の火山体の大きさや広がりなどについては、よくわかっていません。活動の中心が加賀室跡付近と推定されているのは、主に溶岩流の傾斜などからですが、確かなものではありません。現在みられる噴出物の体積は約1km³で、多くありません。長い間の侵食によって、火山体のかなりの部分が失われたためです。



尾添尾根
加賀禅定道の登山道が通っている。



加賀室火山噴出物のおおまかな分布。
清浄ヶ原は古白山火山の噴出物からなる。

古白山火山

古白山火山は10~14万年前に形成しました。火山体の中心部はほとんど侵食されていますが、かつての火山斜面をなしていた緩斜面を見ることができます。その代表が四塚山北方の清浄ヶ原です。白山で最も広い平坦面です。厚さ50~100mの溶岩流が、数枚積み重なってできたものです。北弥陀ヶ原~間名古の頭の尾根から大白川にのびる斜面やゴマ平付近、大汝峰から南西の方へ観光新道が通っている尾根などに残されている溶岩も、古白山火山の山体を構成していたものです。古白山火山の噴出物の体積は、侵食された部分も含めて約15 km³と推定されています。

古白山火山の活動の中心と考えられている中ノ川支流の地獄谷には、かつてのマグマの通路(火道)の一部と考えられるものが、岩脈として数か所で確認されています。そのあたりの標高は現在約1,800 mですが、誕生当時の古白山火山の高さは、現在の白山よりは高く、優に3,000mを越えていたと考えられています。このあたりは、現在、中ノ川を取り囲むように、北に開いた馬蹄形の尾根が発達しています。この地形は古白山火山の山頂部の大崩壊によってできた、という考えがあります。山頂部の大崩壊は、最近では、1980年にアメリカのセントヘレンズ火山で起きたものが、よく知られています。



清浄ヶ原



地獄谷

新白山火山・うぐいす平火山

新白山火山の噴出物は山頂から南の方や、東の大白川の方に流出しています。室堂平・弥陀ヶ原・南竜ヶ馬場などの平坦面は、新白山火山の噴出物によって形成されたものです。剣ヶ峰から東の大白川の方に下る斜面も、新白山火山の噴出物からなります。白水滝や不動滝は、新白山火山の溶岩にかかった滝です。山頂部や山頂部周辺には、火口や火山斜面などの火山地形がよく保存されています。山頂部には、10以上もの火口が確認されており、それらの一部は水をたたえ池となっています。翠ヶ池や紺屋ヶ池・千蛇ヶ池などがそうです。新白山火山の噴出物の体積は約1km³で、古白山火山に比較して少ない量です。

新白山火山が誕生した時期については、新白山火山の噴出した火山灰や古白山火山の年代などから、2～4万年前頃と考えられています。活動は歴史時代ま



白山山頂部

南竜ヶ馬場
この平坦面は溶岩流よりなる。





室堂平(左の平坦面)
と弥陀ヶ原(右の後
方の平坦面)
後の山は別山で、中
生代の手取層群(堆
積層)からなる。



白水滝
新白山火山の溶岩にかかっている
滝。

で続き、古い書物に当時の活動の様子が記されています。

うぐいす平火山は、2個の火山からなります。白山山頂の北東約4kmのところであり、2つとも直径が500m程で、高さは約50mと約80mです。噴出物の体積は2つ合わせて0.01km³で、非常に少ない量です。うぐいす平火山は古白山火山の噴出物の上に形成されていますが、山の形はよく保存されており、新白山火山とほぼ同じ頃に誕生したと考えられます。



うぐいす平火山
(守屋以智雄氏撮影)

三主峰のでき方

御前峰(2,702m)と剣ヶ峰(2,677m)・大汝峰(2,684m)の三つの峰が、白山の山頂部を形づくります。これらの三主峰の姿は、それぞれ異なっています。大汝峰は全体として円く、穏やかな感じを受けます。剣ヶ峰は他の峰に比べると、山頂部は険しく尖った印象を与えます。御前峰はほぼ北西の方向に長く伸びた稜線といってよいでしょう。このような違いは、それぞれの峰の形成された時期やでき方の違いを反映しています。

大汝峰は古白山火山の噴出物からなり、古白山火山の山体の南西部を形づいていたものです。古白山火山が誕生したときには、大汝峰という山はありませんが、古白山火山の中心部が侵食されるに伴い、大汝峰が出来上がってきたのです。長い間の侵食が、あの女性的な穏やかな山体を造ったのです。

御前峰と剣ヶ峰はともに、新白山火山の噴出物からなります。新白山火山は2～4万年前に誕生した際には、現在の御前峰の尾根から北東のほうへ少しはなれたあたりを、活動の中心としていました。室堂平から御前峰への斜面を、もう少し上の方へ延長したところを、その山頂と考えたらよいでしょう。この山体の頂上部は、その後、今から約4500年前に東の方に向かって大崩壊を起こ



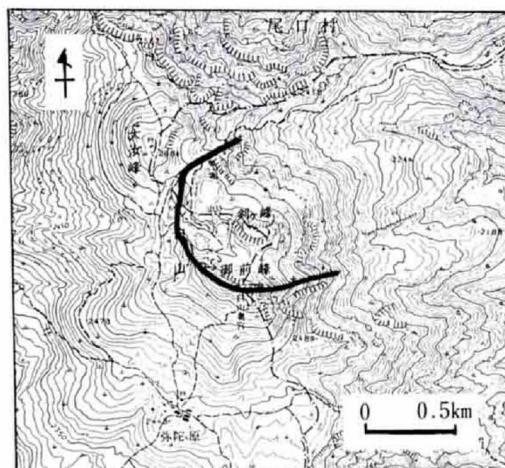
白山の三主峰。御前峰(手前左の峰)・剣ヶ峰(手前右の峰)・大汝峰(後方の峰)
(県民生活課提供)



大 汝 峰



平瀬道から白山山頂部
御前峰(左)と剣ヶ峰(右)



しました。その崩壊によって、東の方に開いた馬蹄形の尾根が山頂に形成されました。御前峰の稜線はその馬蹄形尾根の一部をなしていたもので、崩壊跡の崖といえます。山頂の東麓、大白川にはこの時の大崩壊の堆積物が残されています。

剣ヶ峰はこの崩壊が起きた後、今から2900年前頃に、その崩壊跡の凹地に誕生したものです。白山の三主峰の中では、最も険しく荒々しい感じを与えるのは、形成された時代が新しく、しかも独立した山体として誕生したためです。白水滝付近の溶岩が、剣ヶ峰が形成したときに流れたものです。

白山山頂部の地形

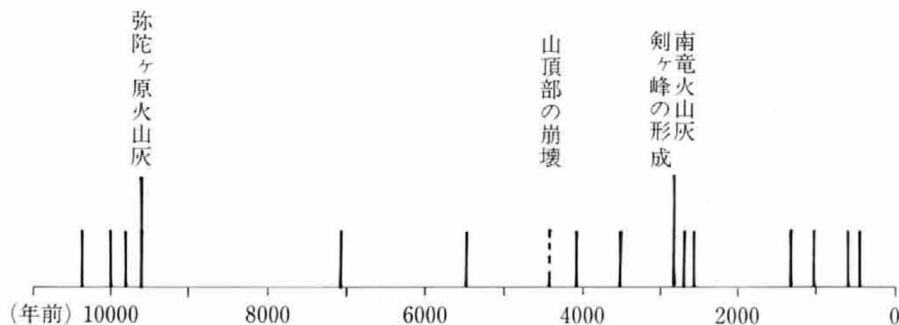
御前峰の尾根を中心にして東にひらいた馬蹄形尾根(実線)は、山頂崩壊によって形成したもので、剣ヶ峰は山頂崩壊の後、その凹地に誕生した。基図は国土地理院発行2.5万分の1の地形図「白山」を使用。

最近1万年の活動

弥陀ヶ原や南竜ヶ馬場・清浄ヶ原などの平坦地には、ところどころ深く掘り込まれた所があります。長い年月の登山者の踏圧や雨水などの流水によるためです。そのようなところで、厚く堆積した地層の断面を観察することができます。地層の大半は、黒っぽい色をしています。これは泥炭とよばれているもので、かつて生育していた植物が、腐って黒い土になったものです。他に、黒い地層の間に、白色や橙色の薄い地層がはさまれています。この薄い地層が火山灰の地層で、これまで18層確認されています。そのうちの1つは、約6400年前に南九州の鬼界ヶ島付近の海底から噴出してきたアカホヤ火山灰で、残りのほとんどが白山火山から噴出した火山灰です。

火山灰が噴出した年代は直接測定することはできませんが、泥炭ができた年代は炭素年代測定法によって知ることができます。その泥炭の年代から、泥炭にはさまれている火山灰の噴出年代を、おおよそ推定することができます。最も古い火山灰は、10400年程前に噴出したもので、最も新しいものは450年ほど前のものです。単純に計算すると、およそ700年に1回の割合で火山灰を噴出していたことになります。しかし、火山灰が降下しても雨水などによって流されることもあるので、これよりも多くの割合で活動があったとみたほうがよいでしょう。

およそ9500年前と3000年前頃に噴出した火山灰は特に量が多く、弥陀ヶ原火山灰と南竜火山灰と名付けられています。これらの火山灰を噴出した活動は、特に活発だったと考えられており、南竜火山灰は剣ヶ峰が誕生した際の活動によるものと推定されています。



最近1万年間に噴出した火山灰と主なできごと

(遠藤、1985と山崎ほか、1987をもとに作図)

歴史時代の活動

歴史時代の火山の活動を知るのに、頼りになるのが昔の人が書いた記録です。しかし、彼らは火山や火山現象について科学的な知識を持っていたわけではないので、火山の活動を表わすのに様々な表現を用いていました。噴煙は「童子」や「法師」、「坊主」などが現れたと表現しています。「焼出」という言葉は、山が燃えることを示したのでしょう。「鳴る」は噴火の際の大きな音をさしています。

白山火山の活動に関連あると考えられる記録のなかで最も古いのが、706年の記録です。これは越前の国の山火事を、白山火山の噴火によると考えたものです。当時、白山は越前の国に属していました。853年と859年の記事は、白山の比咩の神に対する位階の授受を、火山活動を鎮めるために行なったと解釈するわけです。これらの記事は他の解釈も可能で、信頼性は他の記事に比べて低いといえます。

1042年から以降の記事は、その内容が白山の活動を示しており、信頼できるものです。1042年の記事のなかに記されている越前室は、現在の室堂付近にあったものです。加賀室は、当時、大汝峰と千蛇ヶ池の間にありました。加賀室に1人残された僧が、夜中にしかもかなり近くからこの活動を観察しています。それにもかかわらず、火が見えたとか明るくなったとかいうようなことは記されていません。また、埋もれた室が木材でできているのに、燃えたとか焼け焦げたとかいうような記述もありません。そのことから、この時の活動は水蒸気爆発と考えられています。

1554年から始まった活動は、記されている内容から高温のマグマを噴出していることがわかります。このときの活動で、噴煙は鶴来の白山本宮まで届き、活動は断続的に2年間続いています。活発な活動であったことが想像できます。この時の活動が遠く肥後国（熊本県）まで、知れわたって



翠ヶ池。1042年に誕生したといわれる。

いたということが、他の史料に記されています。翠ヶ池から西の方に延びている緩斜面にみられる熱雲堆積物は、植物の生育もまだほとんどなく、比較的新しい時代のもので、1554年から始まった噴火によって、噴出したものと推定されています。



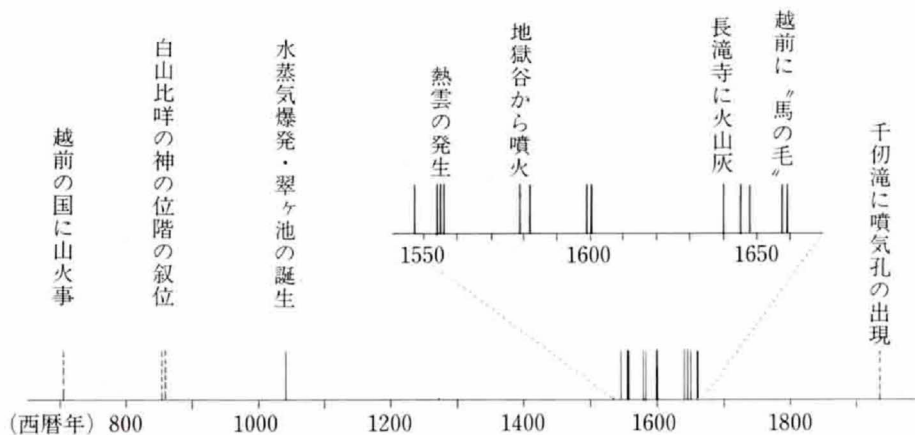
熱雲堆積物

1554～1556年の活動の際に噴出したと考えられている。

1659年に越前に降った「馬の毛」とは、マグマが

細長くのばされ繊維状になったものをいうのでしょうか。

歴史時代で白山火山が活動を行なったのは、10世紀以前の信頼性の低いものを除けば、1042年とあとは1547年から1659年までのほぼ100年間に集中しています。この100年間は、白山火山の活動期といえます。一方、1659年以降現在までと11世紀中頃から16世紀中頃までは、休止期といえるでしょう。白山火山が将来活動を再開した場合、古文書からみると、16世紀中頃から17世紀中頃までのように、100年間ほど断続的に活動が続くと予想することもできます。



白山火山の歴史時代の活動

西暦 (和暦)	記 事 (文 献)
706年 (慶雲3年)	越前の国に、山火事が発生。(続日本記)
853年 (仁寿3年)	加賀国の白山比咩の神を従三位に任じた。(日本文徳天皇実録)
859年 (貞観元年)	加賀国の白山比咩の神に正三位を授けた。(日本三代実録)
1042年 (長久3年)	良勢という名の僧が、越前室で参詣人に悪行を働いていた。これを聞き、加賀馬場の行者ら数十人が越前馬場へ行き、この僧を室ともども焼いた。その夜、行者たちは加賀室に泊まり、次の日、僧を一人残して、帰った。その僧が加賀室に泊まっていると、夜半に大声があり、「室から出ろ」と言って、石を室に投げつけた。そのうち、石を投げつけるのが、雨のようになった。外へ出てみたところ、山頂の方に、2人の童子がいた。その童子は、土石を投げ、室を埋めた。土石を掘った跡が2箇所あり、その1つが翠ヶ池である。室堂が埋まったところに、室堂の材木の端がみえた。(白山之記)
1547年 (天文16年)	5月の末から、白山は頂上から焼出し、火煙や土砂を吹き出した。この年、白川郷では、穀物が不作だった。(猿丸又右衛門家景由緒書)
1554年 (天文23年)	4月1日に、山頂より煙が上がった。山伏を遣わして、調べさせたところ、剣ヶ峰の南の方が焼け上がり、大きな岩を吹き上げて、白山奥宮正殿の床の間の屋根が打ち抜かれた。5月には、手取川は灰と硫黄が流れ、魚が死に、人々は川の水を飲まなかった。6月頃になると、剣ヶ峰全体から煙が立ち上がった。10月8日に、大震動が起き、人々は非常に驚き、鶴来の白山本宮までも煙が充満した。活動は、1557年に止んだ。(白山宮荘巖講中記録)
1579年 (天正7年)	8月26日、地獄谷より火石が降り、社や御神体を壊した。翌年の6月、織田信長が社を3つ再建した。(古今類從越前国誌)
1582年 (天正10年)	6月2日頃に、黒雲が出て、そのなかから法師の形をした者が、3人見えた。(混見摘要)
1599年 (慶長4年)	白山が鳴った。(混見摘要)
1600年 (慶長5年)	白山が鳴った。(混見摘要)
1640年 (寛永17年)	6月15日の午後7時頃から夜明けにかけて、赤く光った。白山の大汝峰から長滝寺まで、火山灰が2日3晩のうちに10cmほど降り積もった。(長滝寺荘巖講執事帳)
1645年 (正保2年)	4月5日と4月26日に、白山が鳴った。(混見摘要)
1648年 (慶安元年)	白山が鳴った。(混見摘要)
1658年 (万治元年)	9月4日に、白山が鳴った。(混見摘要)
1659年 (万治2年)	6月8日に、白山の翠ヶ池の上に黒雲がでた。しばらくして、幾度も幾度も音が鳴り響いた後、雲の中より坊主の身なりをした者が3人、頭をならべて出現した。その後、白山はたびたび音を出し、その数は数えられないくらいになった。6月18日から6月20日まで、越前の国中にあし毛の馬の毛のようなものが降った。(長滝寺荘巖講執事帳)

白山火山の活動に関連ある記録

同じ年に複数の記録がある場合は、代表的なもの1つに限った。記事は現代語の要約で、月日は旧暦。

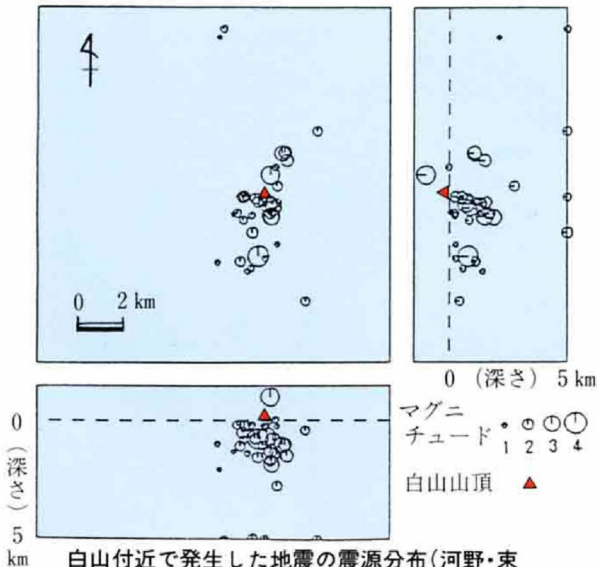
白山周辺の地震

火山の活動は、地下で発生したマグマが地上にでてくる現象と考えることができます。白山火山の将来のことを考えるとき、地下で最近どのようなことが起きているのか、調べる必要があります。直接に地中深くもぐって観察する方法はありませんが、断片的な情報なら得ることができます。その情報の1つが、地震です。

白山周辺に発生する地震は、これまで大学の観測所などで観測され、それぞれの地震の発生場所や大きさが決定されてきました。それによると、あまり精度の良いものではありませんが、白山の周辺がほかの地域よりも地震活動が多いことがわかっていました。最近、ここ10年程の間に白山周辺地域で発生した地震について、精度よく震源が決定されました。その結果、これまで白山の付近に比較的多く地震が発生していると漠然と思われていたものが、ほぼ白山の頂上の真下に集中して発生しているのが明らかになってきました。これらの地震が白山火山の活動と直接関係しているのか、もしくは、他の原因によるもの

かは、地震だけの研究からはまだ結論がでていませんが、白山火山の火口の直下であるということを考えると、白山火山と関係があるものと考えるのが自然でしょう。

白山は現在噴煙を上げるなどの表面的な活動を行っていませんが、これまで観測された白山地域の地震は、白山が火山として生きていることを示す証拠の一つとってよいでしょう。



白山付近で発生した地震の震源分布(河野・東田、1991より)

1980年4月から1989年6月にかけて発生したもの。右図と下図が断面。マグニチュードは地震の大きさをあらわし、数が大きい程大きい。

これからの白山

白山は現在表面的には静かなので、もう死んでしまった火山と思っている方もいるかもしれませんが、しかし、ここ1万年をみると、何度も活動しており、最も新しいので今から330年程前の活動記録があることは、前に述べたとおりです。何十万年の歴史をもつ白山火山の歴史では、数百年はほんの一瞬のことです。白山は火山として生きていると考えるのがよいでしょう。最近10年間に白山周辺で発生した地震の活動は、そのことをよく物語っているといえます。

今ではほとんど忘れ去られています。50年ほど前の昭和10年の冬に、小規模な噴気孔が千仞滝に出現しました。千仞滝は湯の谷川支流の千才谷にかかっている滝で、山頂の南西約2kmに位置します。当時は、大噴火の前兆かということで、人々を不安がらせたようですが、小規模な噴気孔の出現のみで、その噴気孔もほどなく消滅し、ことなきを得ました。この異変も、白山火山が今なお健在であることを示す一つの証拠で、今後とも、注意深く見守ってゆく必要があります。



昭和10年(1935年)の白山の異変を
報じる北國新聞(3月7日付夕刊)

文・構成：東野外志男

白山の自然誌 12

白山火山

発行日 平成4年2月28日
発行 石川県白山自然保護センター
石川県石川郡吉野谷村木滑
Tel. 07619-5-5321
印刷 榎橋本確文堂

